

特集

変形性関節症の診断と治療 —— 保存的治療から再生医療まで

■ 編集にあたって

現在の日本は少子・超高齢社会です。今後も経済活動の担い手である労働人口が減少し、支援や介護を必要とする高齢者が増加すると予想されており、経済へのマイナス負荷が増加し、経済が縮小、社会保障制度の破綻が危惧されています。高齢化の要因の一つに医療技術の進歩、革新がありますが、平均寿命のみならず健康寿命の延伸が重要です。つまり、支援や介護を必要とせず今まで以上に現役で活躍できる期間を延ばし、活動的で元気な高齢者が長く経済活動を行い、未来の日本を支えるしくみをつくらなくてはなりません。

要支援・要介護となってしまう原因のうち、関節疾患を中心とする整形外科疾患が重要であることは言うまでもありません。特に加齢を基盤として発症する変形性関節症（OA）は高齢者の運動器疼痛や機能障害をもたらし、患者の日常生活動作（ADL）を障害するとともに生活の質（QOL）を著しく低下させる、整形外科の日常診療でもっとも一般的な疾患です。OAを有する患者さんのQOLを維持・増進するためには、OAの正確な病態の把握、早期診断、適切な治療選択が必要であり、これらの研究を推進することはわれわれ整形外科医の使命でもあります。

OAに対する基礎研究、臨床研究は日々すすんでおりますが、その範囲は広く、全体像を把握することは容易ではありません。基礎研究ではOAの疫学、疼痛のメカニズム、原因遺伝子研究、分子メカニズム研究やバイオマーカー研究、OA関節のバイオメカニズム研究などが精力的に行われています。治療においては、保存的治療、骨切りなどの関節温存手術、人工関節から再生医療まで行われますが、適切な時期に各部位別のOAに関する知識をアップデートし、日常診療に還元する必要があります。

本特集「変形性関節症の診断と治療—保存的治療から再生医療まで」では、OAの疫学、痛みの発生機序、原因遺伝子や分子メカニズムなどの基礎研究から脊椎や各関節の部位別、病態別にOAに関する診断、治療における最新の研究成果まで、各領域のエキスパートの先生方に解説いただきました。OAの病態から再生医療を含めた治療まで広く網羅する内容となっております。すべての執筆者の先生方に厚く御礼を申しあげるとともに、本書が読者の皆様の明日からの診療の一助になることを強く祈念しております。ぜひご一読ください。

広島大学整形外科教授
安達伸生